

ケインズの林檎

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

どういうわけか、人間の知的活動を説明する際に、「林檎」を象徴として用いることがしばしば行われてきた。非ユークリッド幾何学に関わった19世紀のハンガリーの数学者、ボーヤイ・ファルカシュは、三つの林檎について語ったという（山内得立『生成・創造・形成』弘文堂、1950）。

第一は、アダムとイヴの林檎である。人間の始祖とされる二人は、知恵の樹の実を食べたばかりに、神の怒りを買って楽園を追放され、以後、人類は額に汗して働き、苦悩と罪悪の日々を送らなければならなくなった。この知恵の実がやがて林檎とみなされるようになった。この林檎は宗教思想を表すものと考えられている。

第二は、ギリシャ神話に出てくるパリスの林檎である。たまたま神々が集う宴会の席に、争いの女神エリスが招かれなかった。怒った彼女は一座の中に黄金の林檎を投げ入れ、「一番美しい女神に与える」と宣言した。美貌を誇るヘラ、アテナ、アフロディテの三女神は、われこそはと激しく競い合った。最高神のゼウスもお手上げとなり、審判をトロイの王子で牧人の若者パリスに任せた。三女神はそれぞれ異なった賄賂を約束してパリスに取り入った。パリスは権力や名誉よりも女色に惹かれ、アフロディテが約束したスパルタの王妃を拉致し、ここに有名なトロイ戦争が始まった。金の林檎は価値判断をめぐる争いの象徴となった。

第三は、あまりにも有名な17世紀のニュートンの林檎である。彼は林檎が樹から落ちるのを見て、万有引力の法則を思いついたといわれている。これも伝説にすぎないのであろうが、ニュー

トンとは近代科学革命の先駆者であって、彼の林檎は自然科学の法則性を象徴する。

数学者のファルカシュは、アダムとイヴの林檎とパリスの林檎は、世界を苦悩と原罪と闘争の支配する地獄にってしまったが、ニュートンの林檎は、世界を再び天上に引き上げ、人間の理性を通じて宇宙における神の叡智を読み解くことを可能にしたと論じた。たしかに、三つの林檎の寓話は、宗教・哲学・科学という人類の文化を構成する三要素に関わるものであろう。ここで私は経済学者ケインズの林檎の寓話を導入したいと思う。その狙いは、経済学を自然科学としてではなく、人間の科学として理解する方向を示唆するためである。人間生活における経済の重みから見て、もう一つの林檎を語る十分な根拠があると思われる。

ケインズはニュートンが残した膨大な未刊の原稿やノートや書簡を競売を通じて購入し、ケンブリッジ大学に寄贈したり、ニュートン生誕300年記念に画期的な論文を書いたりして、ニュートン研究に貢献したことでも知られている。そのケインズが林檎の話をしたとすれば、ニュートンの林檎を念頭に置いていたことは明らかであろう。ケインズは、自然科学とは異なる世界観を林檎のレトリックによって表現したのである。

ケインズは同僚の経済学者ハロッドに宛てて、次のような手紙を書いた。「経済学は本質的にモラル・サイエンスであって、自然科学ではありません。すなわち、経済学は内省や価値判断を用いるのです」（1938年7月4日）。「物理学との見せかけの類推に頼ることは、本来の経済学者の資質

として最も重要である精神の習性にまともに反することになります。私は経済学がモラル・サイエンスであることを大いに強調したい。……経済学は動機、期待、心理的不確実性といったものを取り扱っているのです。われわれは、素材を不変かつ同質的なものとして扱うことのないように、たえず注意しなければなりません。言ってみれば、林檎が地面に落ちることが、あたかも林檎の動機に依存したり、地面に落ちることは価値あることかどうかとか、地面が林檎の落ちることを望んでいるかどうかとかに依存したり、地球の中心からの距離についての林檎の誤算に依存しているようなものなのです」(1938年7月16日)。

ケインズは経済学を自然科学に類似したものとは考えず、それをモラル・サイエンスという古風な言葉で呼んだ。モラルとは、人間本性や精神や心理といった意味であり、狭い意味の道徳を指すものではない。人文科学や社会科学は人間を単なる理性的存在と見るのでなく、同時に感情や意志を持った全幅的な存在と見なすという意味で、かつてはモラル・サイエンスと呼ばれた。人文科学や社会科学の対象である社会的・歴史的事象はすべてこのような人間の活動の所産であるから、人間や社会に関する学問は生きた人間像から出発しなければならない。ところが、主流派経済学は、効用極大化を求める消費者と利潤極大化を求める企業者を想定し、モデルの中の効用関数や生産関数を固定して、経済主体の合理的行動を通じて市場均衡が達成されると論ずることに終始した。このような経済学は人間を取り扱ってはいるものの、人間を確実性の支配する環境の中に置かれた合理性の追求者としてとらえ、経済をあたかも機械のような仕組みとして見るものにほかならない。これは不確実性に直面した人間がどのような対応をするかという現実問題を捨象してしまっている。

ケインズは、自然科学的経済観を否定する目的で、経済の世界では、樹から落ちる林檎は一定不変の物理法則に従って落ちるのではなく、あたかも自由な意思を持ち、状況に応じてさまざまなことを意識し思考しながら、時には誤算をも含みながら落下するようなものだと言った。このような

着想を具体化した『一般理論』の体系は、消費性向、資本の限界効率、流動性選好という三つの関数からなるが、これらはいずれも人々の心理的性向である。このモデル的方法的な特徴は、三つの関数と不確実性および期待との関係である。消費関数は現在の嗜好や財の種類を前提とする限り、大きな期待の変化が起こる余地はない。むしろ安定性がその特質である。それに対して、資本の限界効率と流動性選好はそうではない。投資と貨幣の領域は不確実性によって覆われているからである。

不確実性の下で、人々の行動を規定する根拠には二つのものがある。第一は、変化が予想される特別の理由がない限り、現在の事態が将来も持続すると想定することである。これは慣行や制度に依拠する方法である。第二は、依拠すべき情報が乏しい場合には、血気や衝動や気分によって将来を予想することである。これによって、経済活動における確信の高揚や崩壊といった非連続性が説明される。

ケインズの林檎がニュートンの林檎と決定的に異なる点は、意識を持ち、思考し、行動するということである。考える林檎の比喩は、経済学における主観主義の考え方に定着しているといつてよい。主観主義は、経済学の主流派的考え方とは違って、個々人の行為は主観的な意味を担い、多様な行為相互間の関連・調整・変化によって意図されざる帰結がもたらされる過程を問題にする。この過程では不確実性が支配し、期待や憶測が作動し、新しい知識が獲得され、計画が改訂されていく。主観主義はオーストリア学派が唱導する経済学のあり方である。1930年代の当時、オーストリア学派のハイエクやミーゼスはケインズと意見を異にしたが、主観主義の立場に立って、新古典派とは異なる経済変動論を展開したのである。主観主義の経済学は数学的形式主義にとらわれず、生活世界の要素に注目することによって、新しい視野を開くのである。

しおのや・ゆういち 財団法人家計経済研究所 会長・一橋大学 名誉教授。経済哲学・経済思想史専攻。